

# 佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

No.71



朝鮮系無文土器（壺）

弥生時代

器高五十六センチメートル  
小城郡三日月町土生遺跡出土

黒光りする肌の大型壺である。両肩には牛の角を先端で合わせた形状の把手が一対つく特異な土器で、弥生土器の中には類例を見出しえない。正式名称は、組合せ式牛角形把手付き壺形土器である。この類いの壺は、朝鮮半島の京畿道以南に分布する青銅器時代の無文土器（後期）に直接的系譜を求められる。土生遺跡からは、このほか各器種の朝鮮系無文土器が中期初頭～前半頃の弥生土器とともに出土している。

北部九州地方は有史以来、朝鮮や中国との長い交流の歴史がある。なかでも水稻農耕（米作り）文化は、縄文時代の晩期後半ころには朝鮮半島南部から玄界灘沿岸地域に伝えられたことが近年明らかになった。

次に来た文化伝来の大きな波は、朝鮮半島の青銅器文化である。弥生時代前期末から細形の銅劍・矛・戈、続いて多錐細文鏡の副葬が見られる。また、青銅製武器類の国産化は、大和町忽座遺跡や千代田町跡遺跡から出土した鋳造用の石型からみて、中期前半ころに始まっている。

土生遺跡から出土した朝鮮系無文土器類は、青銅器あるいはその鋳造技術を伝えた渡来人と関連する日本産の土器であろう。

目 次	○朝鮮系無文土器（壺）	表紙
	○資料紹介（歴史）——久家家文書にみる波多三河守——	2～3P
	○資料紹介（工芸）——丸田正美と塩釉黒釉流し文盛器——	4～5P
	○資料調査ノート（民俗）——船大工——	6～7P
	○行事のお知らせ	8 P

## 《資料紹介・歴史》

久家家文書にみる  
波多三河守

波多鎮の裁許状

訴訟の旨に任せて 相知村山崎分の儀 申付け候おわ  
んぬ いよいよ忠貞を抽んぜらるべき事肝要たるべき  
ものなり ょつて狀す 件の如し

永禄九年

五月廿六日 源鎮 花押

久家藤助殿

この文書は久家家文書としてすでに江戸時代後期に編纂された「松浦拾風土記」にも記載されている。その後、所在が不明であったが、昭和58年5月北波多村に寄贈されて山崎猛夫氏によって調査が行われている。天文18年(1549)から天正12年(1584)にわたる間の6通の文書の中の1通である。

この永禄9年(1566)ころの肥前の唐津地方(上松浦)は北波多村の岸岳城に居を構える波多氏によって周辺の諸豪族が支配されていたが、その支配力は弱く、鶴田氏、有浦氏、呼子氏、值賀氏などいわゆる松浦党の諸勢力が独立の勢力を保っていた。波多氏内部の内紛、他の松浦党諸勢力との競合、さらには豈後の大友氏や、島原の有馬氏の勢力が上松浦にまで及び、戦国時代の不安定な政情が勢であった。

この書状は波多氏に属していた板木の法行城(伊万里市波多津町)の久家藤助に与えた裁許状である。相知村の山崎分(相知町山崎)にあった土地の支配権をめぐって久家藤助の申立を認めて、かわりに波多氏に対する忠誠を求めている。久家氏は代々波多氏にとって重臣的存在である。



いっぽう、裁許状を与えた波多鎮については松浦党の上松浦における領袖的存在であり他の松浦党の人々と同様に源氏を名乗り、源鎮と称する場合もある。彼は島原の有馬義貞の子で波多を継いたが、これが波多氏内紛の一因ともなっている。彼は16世紀後半における唐津地方の歴史的動向を知るうえで重要な人物であるが、不明な点も多い。生れた年については、「松浦古事記」に文禄3年(1594)42歳あるとの手掛りとすれば天文22年(1553)前後ということになる。幼名を藤童丸と称し、永禄7年(1564)久家与七郎に与えた加冠式には、波多藤童丸と記されている。彼は永禄8年に波多家の家督を正式に相続しているので、この際に、鎮と称したものと考えられる。この裁許状の前年である。鎮と称したのは、豊後を中心に北九州で霸を競い肥前に進出の勢を示していた大友義鎮(宗麟)の偏諱をうけたものと思われる。すなわち、鎮の一字を買ったのである。上松浦にも大友氏の勢力が伸びてきていた背景を物語っているもので、佐賀でも龍造寺隆信が嫡子に鎮賢(のちの政家)と名乗らせているのも大友義鎮の勢力が肥前に浸透してきたためで、波多藤童丸が、鎮と称したのと同一の理由による。波多鎮が、鎮と称するのは天正8年(1580)までである。有浦文書の天正8年8月20日の有浦大和守高にあてた書状には、鎮とあるが、久家家文書の天正9年11月吉日の久家藤助へあてた官途状には



尾張守之事

清

心得候者也

天正九年

霜月吉日 親 花押

久家藤助

とある。以後、久家家文書、有浦文書、小鹿島文書等の文書には、すべて親で統一されている。同じ天正9年には前記の龍造寺隆信の嫡子鎮賀が名を改めて久家と称している。のちの龍造寺政家である。龍造寺隆信は元龜元年（1570）今山の合戦で、肥前に進出しようとした大友氏を敗走させ、これをきっかけに東肥前、つづいて西北肥前の上松浦地方に天正年間の初期に進出した。内紛や、鶴田氏等との抗争に苦しんでいた波多鎮は龍造寺隆信の進出によって龍造寺支配に組み込まれ、鎮は隆信の娘、秀の前（妙安尼）を後妻に迎えるなど龍造寺氏との接近がみられる。この様な状況の中で龍造寺鎮賀が久家に、波多鎮が親に名を改めたことは決して偶然の一一致とは考えられない。

龍造寺氏の勢力伸長によって安定したかに見えた肥前の政治情勢も天正12年（1584）島原の有馬氏を討とうとした龍造寺隆信が沖田継の戦で戦死し、再び、混沌としてきた。波多親は上松浦の小豪族を統轄しながら周辺の諸勢力との間に起譲文の授受を行なながら勢力の維持に努めている。久家家文書の天正12年11月13日の久家新三郎への書状は龍造寺隆信戦死後の龍造寺氏の勢力退潮の中で、自ら新三郎へ官位を与えている。

官途の事 所望により源介に任じ候也

天正十二

十一月十三日 親 花押

久家新三郎殿

肥前の政治情勢が不安な中で、天正15年豊臣秀吉による九州平定が行われる。島津攻めという形で全国的な中央政権が進出してきたが、波多親は秀吉への対応が充分



味方して戦っている久家の軍忠を認める書状で、これによって戦後の恩賞が約束される。

ではなかった。上松浦地方の領袖として秀吉の島津攻めに協力できなかつたのである。これは親が秀吉政権に対する認識を誤つたこともあるだらうし、また、上松浦地方の諸小勢力の統轄も不充分だったと考えられる。九州平定を終った秀吉は波多親に知行分として750町歩を与えており、秀吉は下野守を称していた親に当初は大名としての待遇を与えなかつたのである。

今度 御恩地として肥前国上松浦郡内に於いて 当知行分七百五拾町歩の事 先行おわんぬ 全て領知致し向後は忠勤を抽んずべき由に候也

天正十五年六月二十一日

波多下野守とのへ（鍋島家文書）

小地方豪族の遭遇を受けた親であるが、天正16年には、上京し、聚楽第での後陽成天皇の行幸に参列した。この際に秀吉によって従五位、三河守の官位と豊臣の姓を名乗ることを認められている。この大名としての遭遇を親は大満足で有浦大和守高に報告している（有浦文書）。しかし、文禄元年（1592）の朝鮮への出兵には独立の大名としての扱いではなく、鍋島直茂への寄騎（与力）を命ぜられた。いわゆる与力大名である。しかも、文禄の役の撤兵の際には、

……虚病を構え 金海船付りに在りて 終に相戦かはざるの段 前代未聞の臆病者……（鍋島家文書）  
として、所領を没収されて筑波に流された。その後は秀吉の側近寺沢忠摩守広高（忠二郎）が代官として唐津を中心とする上松浦地方を支配し、ひきつづいて近世大名として唐津藩主としてその基礎を築いた。波多三河守親は流謫地で没し、岸岳城は廃城となつた。

以上、久家家文書を中心に波多三河守親についてのべたが、滅んだ波多氏には残された史料が乏しく、謎の部分がまだ多い。

（学芸課長 小宮睦之）



まる た まさみ えんゆうこくゆうなが もんもりき  
丸田正美と塩釉黒釉流し文盛器

〈資料紹介・工芸〉



丸田正美

ここに、昭和39年（1964）佐賀県立博物館の前身である佐賀県文化館に寄贈を受けた大振りの鉢がある。その作者、日本工芸会正会員であった故丸田正美（1925～1979）の略歴と作風、技法を以下に紹介し、作家に対する認識を新たにするとともに、より深い作品鑑賞の一助になればと思う。

武雄市武内町大字真手野字黒牟田、正美が生を受けて、後黒牟田焼丸田正美窯を築いた土地には、桃山末期に朝鮮系陶工深海宗伝一族が中心となって開いた武雄古唐津北部系の古窯、鍋谷窯、黒牟田向家窯、内田小峰窯、内田大谷窯などが点在する。土（陶土）と炎（木）、豊かな水にめぐまれた山あいの斜面に築かれた登り窯は、風向によって効率よく窯の焚ける利点もあり、江戸時代を通じて庶民のための日常生活用器類である碗・皿から大甕までを焼き続けてきた。後年、正美が民芸運動の提唱者、浜田庄司の影響を受け、生活の器に自然な美しさを追求していく環境は生まれながらにして定められていたようだ。

大正14年9月10日、正美はのち村会議員となる丸田寅馬の次男（9人兄弟）として誕生、兄弟のうち宣政は黒牟田で、泰義は福岡県浮羽郡一ノ瀬で窯を築いている。父親は登り窯を経営する窯主で、職人を雇って擂鉢・急須・茶碗・火鉢・植木鉢・湯たんぽなどの製品類を昭和20年頃まで作っていた。昭和17年12月、佐賀県立有田工業学校窯業科を卒業するとともに、昭和21年までの3年間を軍属として派遣された満州です。満州では土質や鉱物類の採集・分析の仕事に従事し、粘土や釉薬の原料についての知識を体験的に深めたものと思われる。

帰国後、再び父の窯で一職人として細工から窯焚きまで一通りの仕事を覚えるとともに、昭和22年佐賀県美術工芸展に初入選する。当時は、黒釉・伊羅保禪（灰緑色の半透明釉）・高麗釉（いく分白濁した木灰釉）・鉄砂釉・青釉（銅緑釉）といった古唐津の伝統的な釉薬を使い、白化粧土を束ねたフラスボで打ちつける刷毛目文様や白化粧をした器の上にロクロの回転を利用して指で文様をつける指頭文、スポットを使ったイッテン描きともいわ

れる筒描き文様・鉄砂釉の絵唐津文などの古くからの装飾法を生々と再現している。

昭和24年10月、佐賀県経済部の商工技師永竹威と正美的父寅馬は、陶磁器産業の振興と民陶黒牟田焼の将来の方向を探る目的で、栃木県益子の浜田庄司を訪問する。翌昭和25年、沖縄から大分県の小鹿田・福岡県の小石原と九州各地の窯場をめぐり歩いていた浜田自身が黒牟田の地まで足を伸ばした。これを機会に、当時の沖森佐賀県知事の推薦をうけた正美は、同年4月益子の浜田の元で修業をはじめる。名もない職人達が庶民のために作り出し、生活の中に埋もれた品々、その中に豊かな生命力と力強い美を汲み出した民芸運動の中核にあり、黙々とロクロを廻し続け、生活と作品の両者でその活動を具体化しようとする師浜田庄司の姿に、正美は多大な影響を受けたにちがいない。これ以後、重厚な大鉢や瓶の荒げずなり形態が生まれ、なじみの深い黒牟田の釉薬が土くさい素朴さを残したまま、打掛けや流し掛けのスピード感ある装飾法と共に存してゆき、後塗釉の技法に熱中することになる。

こうして、陶芸家として歩み始めた正美は徐々に表現力をつけ、翌昭和26年第1回佐賀県美術展（「県展」）に入選し、以来毎年入選・入賞を続け、昭和37年第12回より第19回展までは県展嘱託として活躍する。昭和38年には佐賀県美術協会の会員に推挙された。

その間、昭和30年に結婚し、父の窯を離れ、単身栃木県の益子で再修業する。帰途山口県の萩・愛媛県の砥部の窯場を廻り、佐賀に戻った後も磁器の町有田で庄村窯の細工場を借りてロクロを回した一時期もあった。

昭和35年末、黒牟田に帰り、黒牟田焼を民陶として再興すべく活動を再開する。昭和37年・昭和38年と自分の窯を築くが、意にかなわず、昭和40年10月に築いた工房と新たな登り窯でいよいよ念願の塩釉作品を次々に作り出すことになる。

昭和41年、西部工芸展の名で知られる日本工芸会西部支部展で入賞、昭和45年第17回日本伝統工芸展に初入選、同年毎日新聞社主催の毎日陶芸展入賞、昭和47年第34回一水会展で一水会賞を受賞と全国的に正美の陶芸は高い評価を受ける。こうした実績をかわれ、昭和53年佐賀新聞社から芸術文化奨励賞を受けるとともに、日本伝統工芸展の入選歴により日本工芸会正会員として認められた



図版1：塩釉黒釉流し文盛器（鉢）昭和38・39年 館蔵



図版2：塩釉刷毛目草花文陶鉢 昭和53年  
である。

華々しい活躍の最中、正美は同年12月に国立姫野病院に入院した。昭和40年からわずかに10数年間の精力的な創作活動は、翌54年12月6日正美的死とともに終焉をむかえた。昭和53年10月、最後の窯焚きを自分の手で行った後入院をするが、入院中もたびたび細工場に戻っては器に絵付を施したり、箱書きに精を出したという。志なかばにして創作を断念せざるをえなかった彼の「おったんのう、おりやーくやしかばい」という言葉には、無念さがにじみ出る。

しかし、残された正美の作品にはみじんの暗さもない。大らかで力強い造形と一見荒々しく見える無造作な装飾が調和して、器として機能する心を忘れていない作品、確かな職人技に陶芸家の鋭い目を注いで生まれた創造物である。

この塩釉の鉢（図版1：口径35.0cm、高さ20.9cm）は寄贈年から昭和38年か39年頃の作品と思われ。本格的に塩釉技法ととり組む昭和40年以前の作で、つまり塩釉模索中の珍しい作品である。昭和40年以降の塩釉を用いた器の大部分には、素焼の時点で白化粧土による刷毛目文を素地全体に施しているが、この器にはその化粧掛けのあとはない。素焼の黒釉（天目釉）をひしゃくでたらし、口部には鉄砂釉または天目釉を筆で薄く塗った口銷を配して、そのまま1,300°C以上の本焼窯に入れて焼く。この時、釉薬（陶磁器の表面にガラス質の皮膜を作つて保護・強化するもの）は、一切掛けない。薪の焚口と3間の窯室からなる正美的窯では、焚口側から数えて第3室を塩釉専用として、温度が1,300°Cに達した後両側の焚口から交互に窯室の中に岩塩を投げ込む。岩塩は高温で気化し、登り窯の火力となる木材から炎の中にこれも気化



図版3：塩釉與須天目釉市松文陶鉢 昭和49年  
している木灰、釉薬の成分の一部と化合して、釉薬状のガラス質皮膜が器全体の表面をおおう。一般に天目釉・伊賀保釉・柿釉といふ時の釉とは異なる「岩塩焼成後釉化」・「塩焼釉」とでも呼ぶべきものである。

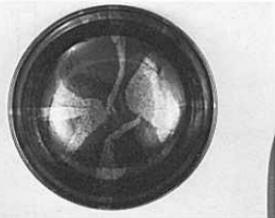
ヨーロッパでは、古くからジョッキなどの日常用食器類に使われている技法で、バーナード・リーチを通じて浜田庄司に伝わり、ここで正美の探求心を刺激したものだらう。

正美はクロコ成形の後、特に姿の美しいものから塩釉用の器を選び、窯詰めにも赤貝を使った貝自駆（皿鉢5枚・壺・抹茶碗・湯呑み3枚）と決めており、作品として重視していた。薄く白化粧土を刷毛塗りした後、素焼きし次に装飾を加える。筆書きの絵文様、ひしゃく掛けの流し文様、打掛け文様、器外側のみに施釉したものの（図版2：口径42.3cm、高さ13.6cm）、掛け分け文相（図版3：口径41.5cm、高さ14.8cm）などを本焼窯に入れ、炎と岩塩の窯変作用が期待どおりの作品を生み出すことを念じながら窯を焚く。

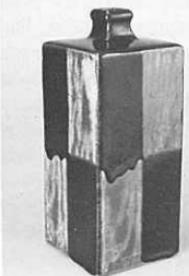
もちろん塩釉以外の作品にも正美の力量は発揮され、天目釉の地に柿釉を流し掛けした鉢（図版4：口径41.0cm、高さ11.9cm）、天目釉を掛けた後、カンナで市松文様にけずりおとした角瓶（図版5：胴径11.0×11.0cm、高さ25.7cm）などが残っている。

ここに紹介した作品は、昭和60年12月から昭和61年3月にかけて美術館常設展の工芸部門の一部に展示する予定である。

御協力くださった各氏にお礼を申し上げるとともに、「武雄古唐津系陶芸技法調査記録」（佐賀県教育庁文化課編、昭和49年）を参考文献として使用したことと追記しておく。  
(学芸員 宮原香苗)



図版4：天目釉柿釉流し陶鉢 昭和50年



図版5：天目釉市松文角瓶 昭和48年

## 《資料調査ノート・民俗》

### 船大工

内海である有明海は、その利用海面が狭く、干潮時には広大な干潟が姿を現わし、満潮時に於いても、その最深部が20mしかないことから、極めて零細小規模な漁業が営まれてきた。

この不利な自然的条件を克服するため、朝鮮海峡・東シナ海方面への出漁と各種養殖が行われるようになるが、このことは網漁の規模拡大と共に、船の利用度、あるいは必要性を高めたといえよう。

さて、このような船の進出の影には、当然のことながら伝統的な造船法を伝えてきた船大工の姿があった。その存在をけつして軽視してはならないし、今となっては、和船の伝統を伝えるほとんど唯一の存在といってよいくらいのものと思われる。

ところで、船の生いたちについて振り返ってみれば、まずそれは浮きとしての木片に始まり、次いで船の始めとしてのいかだ船が現われ、その後くり船(丸木船)、縫合船、組立船といった順にその造船技術も進歩の跡を辿ることになる。

今回調査にあたった、川副町呉服に在住の船大工龍勝一氏（現在76才、大正から昭和初期にかけて鮫鯨船・荷かた船・伝馬船などを製作）が手掛けられた船は、上記各段階内の縫合船に相当する。すなわち、木板を縫ぎ合わせていく方法であり、西洋風な木造船で代表される、船の骨組みをつくり、それに外板を張って船体を作っていく造船法とは、全く別の造船法である。

よって、以下に述べる龍氏の造船法の一部は、和船の伝統を伝える重要な資料になりうるものと思われる。

まず用材であるが、これは専ら杉が使用された。山から杉材を運び出す際には、木挽きさんによって丸太が縦半分に切断され、運搬しやすいようにされたという。この時、木の曲がりに沿って切断する場合もあり、高度な技術が必要とされた。主な用材としては、熊本（天草）、宮崎（日南、日向）の杉材が使用されていたが、特に日向べんこうと呼ばれる杉は、油氣があり水分を吸収しにくい特性と彈力性に富んでいることから、船向けの杉として重宝された。その他、目が細かくよく水車等にも利用された千栗杉や、堅くてねばりがあるこうら杉なども利用されたというが、特に佐賀県は水に弱く、耐久力がないため殆んど使用されなかった。

これら杉材は板状に切断され、十分に乾燥がなされた後、各種鋸器あるいは鉋によって部材作りが行われ、船の製作へとはいっていい。この時、縮尺10分の1の板図が用いられる。

筆者が龍氏に説明いただいたのは5枚板からなる船の製作法であり、特に底板（カワラ）の接合法に於いては実演していただき、和船製作上の理解の助けとなつた。

上記製作に用いる特色ある船大工用具を数点あげてみると、クギサシノミ、ツバキリ、オトシサシ、ノミウチ（マキハダのノミ）といった各種ノミ、及びヌイクギ、通りタグ（ワタクギ）、貝オリといった各種釘等がある。

では以下、実演による底板の接合法を工程順に説明する。

まず、底板に釘の挿入口であるダケ穴を作り（底板は2枚から成り、おのの厚みが違うが、釘は薄い方の板から打ち込まれるため当然ダケ穴も薄い方の板に作られる）、水中では木が膨脹するため、木ごろしといって底板2枚の各接合面を金槌で叩き締める。次いで釘が打ち込まれるが、底板の縫合せの場合は、釘はあらかじめ曲げておき、釘先が挿入しないもう片方の底板から突出しないようにするという。また、ある程度釘が挿入された時点で釘締めが用いられ十分に打ち込まれる。この時使用される釘はヌイクギであるが先述したように釘には3種類があり、船の部分によって使い分けられ、例えば、ウワダナとネイタ・カワラとネイタの各接合部分、あるいはマツラ（助骨）を各5枚板に固定する場合には通りタグが用いられる。

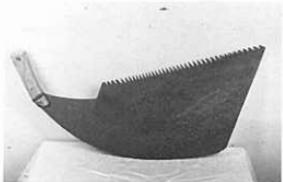
釘が打ち込まれた後にダケ穴が残ることになるが、ここにはダケ木（木片）が埋め込まれ、さらに板より突出した部分についてはチュウノウあるいは鎌によって切断される。

以上のようにして底板2枚の接合作業は進行するが、最後に、水漏れ防止のためにマキハダという檜皮でできた紐状のものが、ノミウチによって底板の縫合目に埋め込まれていく。この時、マキハダは自ずと壊れながら埋め込まれ、十分に接着剤の代わりを果たす。また、船釘によって木目を切ってしまう際（例えは前述したようにマツラを各5枚板と接合する時）にも水漏れ防止としてマキハダは使用される。しかし、木目沿って釘を打ち込む場合はマキハダを用いる必要がなく、自然に締まるという。

この他、船板の接合技術として船釘を用いない方法も全国には存在し、△型のチギリもしくはリューゴなどと称する木片を船板の合わせ目にはめこむ方法と、船板を合わせるその接觸面に漆をぬってこの両者の力だけで、船体をつくりあげる方法があるという。

今となっては、このような伝統的造船法による船はほとんど姿を消し、プラスチック船にとって代わった。今回の調査地である川副町呉服の早津江川河岸にも数多くの船が岸付けされていたが、やはりそのほとんどがプラスチック船であった。しかし、龍氏の作業場には20年前に注文を受けたもので買い手がつかなかつた一隻の木造船が、まだ船おろしされないまま残されており、筆者は伝統の重さをそこに感じると共に、一抹の寂しさを覚えた。

（学芸員 山崎和文）



木挽きさんによって使用されたコピキノコ（継挽用）



部材作りに用いる鋸



鉋（曲面用）

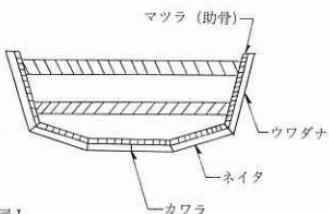


図 I



クギサシノミ（上）とダケ穴（下）



ツバキリ



オトシサシ



ノミウチ



貝オリ（上）・ヌイクギ（中）・通リクギ（下）



釘め



ダケ木（左）・通りクギにマキハダを差し  
つけて打ち込むことにより水漏れを防止  
する（右）



チュウノウ



水漏れ防止のためマキハダを埋め込む

## 博物館・美術館日誌

7月10日	佐賀県立博物館・美術館報No70完成	8月21日	蒼海・梧竹展（9月1日迄） 第13回七夕書道展（8月25日迄）
7月13日	博物館・美術館協議会	8月28日	EVENT'85（9月1日迄）
7月17日	第6回二科会佐賀支部展（7月21日迄）	8月30日	石膏デッサン教室開講式
7月24日	独立C・S展（7月28日迄） 博物館学館務実習開講式	9月4日	第17回佐賀県勤労者美術展（9月8日迄）
7月26日	考古資料の旧理科センターへの移動	9月7日	第6回九州新工芸展（9月16日迄）
7月28日	緑光会スケッチ大会	9月13日	第35回佐賀県児童生徒理科作品展（9月20日迄）
7月29日	博物館大展示室収納スペース改修工事（7月31日迄）	9月20日	昭和60年度日本芸術院美術展（10月13日迄）
7月31日	武雄市絵画クラブ10周年記念佐賀展（8月4日迄）	9月24日	博物館考古歴史部門展示換え
8月2日	石膏デッサン教室開講式	9月28日	第5回よみがえれ佐賀展（10月6日迄）
8月3日	博物館学館務実習開講式	10月16日	農協共済小学生 第11回交通安全ポスター展 第21回書道展（10月20日迄）
8月7日	第34回緑光会展（8月11日迄）	10月17日	ペルリン・フンボルト大学 ペルント博士（ケンベル研究家）来館
8月10日	博物館民俗部門展示換え		
8月14日	第5回日韓文化交流展（8月18日迄）		

## 行事のお知らせ（昭和60年度）

### 常設展

展覧会名	会期	観覧料	会場
佐賀県の歴史と文化展	12月5日～3月31日	大人 200(150)	博物館
近代の美術・工芸		大・高生 150(100) 中・小生 70( 50)	美術館

### 企画展

展覧会名	会期	会場	展覧会名	会期	会場
第35回佐賀県美術展	11月1日～11月10日	博物館	さが行動会	1月22日～1月26日	美術館
第9回佐賀県高等学校芸術祭	11月16日～11月24日	博物館	第8回二紀佐賀グループ展	1月29日～2月2日	美術館
第26回佐賀県学童美術展	11月27日～12月1日	美術館	第31回書初書道展	2月5日～2月9日	美術館
第5回九州二科会写真部公募展	11月27日～12月1日	美術館	古代史発掘展	2月8日～3月2日	博物館
第9回エマ会展	12月11日～12月15日	美術館	佐賀大学教育学部美術工芸科卒業制作展	2月19日～2月23日	美術館
第6回佐賀新聞学生書道展	12月18日～12月22日	美術館	第15回九州グラフィックデザイン展	2月26日～3月2日	美術館
			佐賀県現代美術展	3月8日～3月30日	美術館

博物館・美術館報 第71号
発行年月日 昭和60年12月1日
編集 大塚正道
発行 佐賀市城内1丁目15番23号
佐賀県立博物館
佐賀県立美術館
印刷 大同印刷